



アメフトと弁護士業務

会員 宮澤 真志 (69期)

私は大学時代、アメフト部に所属していた。アメフトは、私が大学時代の全てをかけた、まさに私の青春である。

本稿では、日大タックル問題以降、危険性ばかりを強調されがちであるアメフトについて、その魅力と共に弁護士業務との共通点を解説することで、イメージ向上を図りたいと思う。

そもそもアメフトとは、11人の選手を擁する2つのチームが、ラグビーのような楕円球を用いて、得点を競い合うスポーツである。野球のように、オフェンスとディフェンスが明確に分かれており、主たる得点方法は、ボールを前に進めてゴールラインを超えること等である。アメリカでは最も人気のあるスポーツであり、日本でも、カレッジスポーツとしては意外と人気がある。

私が思うアメフトの最大の魅力は、究極のチームスポーツとしての特性にある。

オフェンスでは、ボールを投げる又は渡す役割の選手(QB)や、投げたボールを捕る選手(WR)、渡されたボールを持って走る選手(RB)のほか、RBの走るルートをかじり開けるあるいはQBを守る選手(OL)がいる。各選手の役割はルール上あるいは作戦上予め決められており、各選手が所定の役割を果たすことで、ボールを前に進めることができる。彼らはいわば、「アクション型」の選手である。

他方、ディフェンスは、OLと対峙するDL、WRと対峙するDB、DLとDBの間で多様な役割を担うLBにより構成される。ディフェンスの場合、オフェンスの陣形などにより、適宜作戦を変えながら、各選手の役割を調整していく必要がある。彼らはいわば、「リアクション型」の選手である。

このように、アメフトでは、オフェンスとディフェンスで大きく動き方が異なるうえ、各選手に与えられる役割も多種多様である。そのため、同じスポーツを行っているにもかかわらず、選手同士の体格や能力に統一性が無い。背が高い者、俊敏な者、力が強い者、相手の行動予測に優れる者など、千差万別である。

各選手が自らの個性を発揮し、仲間の能力不足を補い、ときには与えられた役割以上の結果を出すことで、チームを勝利へと導く。それが、アメフトが究極のチーム

スポーツたる所以である。

このようなアメフトの特性は、弁護士が日々業務を行ううえで、事務員のほか他士業など、弁護士以外の役割を持つ者と協同して業務を進めていくことと通ずるものがある。

そんな究極のチームスポーツであるアメフトだが、最終的なチームの強さを決めるのは、やはり個の力が大きい。個の力といっても、持って生まれた体格やスキルの問題では無い。精神力や基礎力の問題である。

特に対一の勝負では、精神力や基礎力の差により結果が決まる。

私が担当していたDBというポジションは、WRの捕球を妨害するほか、走ってくるRBやWRにタックルする役割を担う。私のところまで来るRBやWRは、スピードがついた状態であり、かつ広い空間での勝負となることがほとんどである。万が一にでも、こちらが足を止めてしまえば、相手にどんどん逃げられてしまう。タックルしたと思っても、足を止めてしまえば、相手に振り切られてしまう。

相手を仕留めるためには、「足を掻き続ける」しかないのである。

弁護士業においても、同じことが言える。契約に基づく報酬請求の訴訟であっても、その契約書が契約の実態を適切に反映しているかどうかは分からない。尋問まで行って初めて争点に対する判断ができることもある。判決という結果が出るまで、どうなるか分からないのである。

どうやら、私はこれからも、起案と格闘しながら、足を掻き続けていくしか無いようである。



画面右下が相手のボールをインターセプトする筆者